



学校は失敗するところ！ 教室は間違えるところ！ 授業は子供が主人公！ 誰一人取り残さない！
子供の成長を教育活動のど真ん中におく！ One for all. All for one. ONE TEAM. チーム拝二小

I 問題の所在

2020年度の「問題行動・不登校調査」結果が文部科学省から公表された。いじめの認知件数(小中高特)は、前年度比16%減の51万7,163件となった。2020年度は長期休校が明けて、感染防止のために授業中も距離を取り、給食も黙食で交流が制限された…中での件数(略)…

一方、特に小学校では、パソコンや携帯電話を使った「ネットいじめ」は32%増の7,407件であった。ここで、今一度「いじめ防止対策推進法」(2013年)の趣旨をしっかりと捉え直していく、教師の人権感覚を研ぎ澄ましていく必要があるのではないだろうか。

なぜなら、「これぐらいは大したことない」と対応していなかった、「一人で抱え込んでいたり」、「報告しても具体的な解決策や役割分担を考えずに、『これから気を付けてみていきましょう、見守ろう』で終わったりする」というような現状はない、と言い切れないのではないか。

II 「いじめとの向き合い方」〈解決策〉

◇ いじめは「いつでも、どこでも、誰にでも起こり得る」という前提に立つ。
教師の大事な使命のひとつ：人権感覚・人権尊重の精神を培っていくこと。

1 チームで対応し、教師一人一人がアンテナを高くしておく。

○学校のいじめの多くは学級の中で起こっており、担任は自分の指導力が足りないと悩み、一人で抱え込んでしまうことがある。しかし、学年やいじめ対策委員会、管理職に報告・連絡・相談し、チームで対応することが大切である。また教師一人一人は、いじめに対するアンテナを高くしておくことが求められる。そのためには「いじめの態様」をよく把握しておく必要がある。

・冷やかしやからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる。 ・仲間はずれ、集団による無視をされる。 ・軽くぶつかったり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする。 ・金品をたかられる。 ・金品や物を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする。
・嫌なことや恥かしいこと、危険なことをされたり、させられたりする。 ・パソコンや携帯電話で誹謗中傷や嫌なことをされる。

2 SOSを出せる学級づくりをする。

○学級内の差別構造を壊す。「いじめの温床になる授業とは？」

・いつも同じ子が発言している。
・特定の子の意見には反対が出ない。
・多様な意見が出ない。

続けていくと

●自由に自分の意見が表明できない状態！
●所属意識がもてない状態！
⇒差別構造がますます強化されてしまう！

☆児童一人一人に、「いま現在の『できる・できない』の差は微々たるものであり、今後の努力で決まる。」という意識をもたせる。

☆「誰もが進んで発言できる」ような授業を展開する。

☆学級力スタンダード(③誤ったことをしている友達がいたら、見て見ぬふりをせず、注意することができる学級です。④友達の心を傷つけることを言ったり、からかったりしない学級です。⑤分け隔てなく、誰とでも接し、協力して活動することができている学級です。…(略))を活用し、「振り返り⇒よさ・課題⇒解決策」について、真剣に話し合う場を設定する。

3 児童との信頼関係を築く。

○いじめられている子は、いじめられていることをなかなか言わない。「この先生に相談したら何とかしてくれる」、「この先生に話すと気持ちが楽になる」という信頼を、教師が日頃からいかに得ているかが問われる。

☆学級経営におけるガイダンス機能と、カウンセリング機能を充実させる。

☆一人一人の児童にとって、学級が存在感を実感できる・発揮できる場になっていることが大切である。